

## 50

## ロンドン外科学史瞥見

—ジョン・ハンターと王立外科医協会—

佐藤 裕

誠心会井上病院外科

イギリスにおいて現在も科学的外科学の推進者として尊敬され続けているジョン・ハンター (John Hunter: 1728–1793) は、近代外科学の父と讃えられるフランスのパレ (Ambroise Pare: 1510–1590)、フェノールを用いた防腐法を創始したリスター (Joseph Lister: 1827–1912)、世界に先駆けて胃癌切除手術を成し遂げるにより近代的腹部外科の道を拓いたウィーンのビルロート (Theodor Billroth: 1829–1894)、根治的乳房切断術を提唱するとともにアメリカにおいて外科医育成のためのレジデント制度を導入したジョン・ホプキンス大学のハルステッド (William Halsted: 1852–1922) らとともに、「外科学をして今日の外科学たらしめた」多大な貢献をなしたことから、外科学の歴史において重要な位置を占めている。言い換えれば、外科学史上の主要な柱石 (Pillars of Surgery) の一人であるといえる。しかし、日本においては、ハンターの名前と彼の貢献については、防腐法 (Antisepsis) を提唱したリスターほどには知られていない。

ロンドン市内には多くのNHSの管理下にある医学関連博物館が存在する。昨秋このロンドンに旅する機会があり、イギリスにおいて「科学的外科学の推進者」と讃えられているハンターの足跡を辿ることができたので紹介する。

最初は、有名なピカデリー・サーカスから地下鉄で一駅東側に位置する「レスター広場 (Leicester square)」である。公園のほぼ中央に、ステッキを持って山高帽をかぶった見慣れた姿のチャップリンの銅像があり、その片隅に演劇、オペラやミュージカルの当日券が入手できるチケット売り場がある。往時この地に、博物学者ハンターが蒐集した莫大な数の標本を展示した博物館や解剖講義実習室を兼ね備えた住居があったのである。この広場の南西側の入場ゲートは「Hunter gate (ハンター門)」と名づけられており、この傍らにハンターの胸像がある。ちなみに、北西側の入場ゲートは「ニュートン門」と呼ばれており、ニュートンの胸像が出迎えてくれる。

次が、リンカーン・イン (Lincoln's Inn) にあるイギリス王立外科医協会 (Royal College of Surgeons of England) と、その中にあるハンターが遺した膨大な博物学標本を展示するハンタリアン博物館である。入場すると、すぐ右手にチェゼルデン (William Cheselden: 1688–1752) やクーパー (Astley Cooper: 1768–1841) の肖像が掲げられており、正面の奥のほうでハンター (の大理石像) が出迎えてくれる (当日は館内の一室で乳がんの診療に関するセミナーが開催されていた)。2階の展示室に通じる階段の途中には、ハンターの弟子で王立外科医協会の主要メンバーであったクーパーやアバナシー (John Abernethy: 1764–1831) らの胸像が飾られている。2階の中央部がハンタリアン博物館展示室である。入り口の両脇にはハンター兄弟の肖像画が掲げられ、内部の左右のガラス棚には解剖標本が整然と展示されている。奥にまわると、アイルランドの巨人オプライエンの骨格標本や、下肢動脈瘤の切除標本や歯牙の移植実験を試みた鶏の頭部の標本が展示されている。さらに3階にあがると、外科学の流れが判るような展示室となっており、その中心は防腐法により外科学の進展に大いに寄与したリスターである。ここには、リスターが愛用した手術台や彼のなした業績が判り易く展示されており、リスターがなした貢献の大きさが十分に顕彰展示されている。

ハンターの功績は、それまでの外科学に科学的手法すなわち観察 (比較解剖学や博物学標本の蒐集) と実験を導入することにより、科学的外科学を推し進めたことにあり (このハンターの口癖が、「Don't think, try!」であった)、今回の見学で、この博物館はハンターの精神を具現化したものであると実感した。